

自他共に大切にできる生徒を育成する生徒指導の在り方

— 教科・領域相互と関連させた特別活動のカリキュラム開発を通して —

【研究者】

特別支援教育・教育相談部 指導主事 香川 隆太・石原 昌子
企画部 指導主事 末田 純司・荒木 美花

【研究指導者】

奈良女子大学生活環境学部心身健康学科 教授 伊藤 美奈子

【研究協力員】

竹原市立竹原中学校 教諭 石原 朋枝
海田町立海田中学校 教諭 兵藤 誠

研究の要約

近年、社会状況の変化を背景に、学校において自分や他人を大切にすることが難しく、よりよい人間関係を築くことができていない生徒がいる。特別活動が目指す自己実現を図ろうとする態度を養うことは、生徒指導の目標である、自己指導能力の育成と重なることであり、特別活動においては、自他共に大切にできる生徒を育成することの必要性が示されているが、必ずしも、十分育成されていない現状が見られる。

そこで、自他共に大切にできる生徒の育成を目指し、学級活動を中心とした、教科・領域相互と関連させた特別活動のカリキュラムを作成し、自他共に大切にできる生徒を育成する生徒指導の在り方を提言することとした。

文献研究及び実態把握を基に、自尊感情を高め、自他共に大切にできる生徒を育成することに有効である、レジリエンスの学習プログラムを基に、特別活動の学習プログラムを作成し、研究協力校において実施した。その結果を踏まえて、自他共に大切にできる生徒を育成する学習プログラムと、教科・領域との関連に係る提言をすることができた。

目次

I 問題の所在	85
II 研究の基本的な考え方	86
III 研究の目的	90
IV 研究の内容及び方法	90
V 研究の仮説と検証	90
VI 学習プログラムの開発	90
VII 実態調査	91
VIII 研究授業	92
IX 結果と考察	93
X 学習プログラムと教科・領域との関連に係る 提言	99
XI 成果と課題	104

I 問題の所在

近年、社会状況の変化を背景に、生徒の生活体験の不足や人間関係の希薄化、規範意識の低下などが顕著になっており、よりよい人間関係を築けないことや、社会性の育成が不十分な状況が見られる。

学校においても、自分や他人を大切にすることが難しく、よりよい人間関係を築くことができていない生徒がいる。

中学校学習指導要領（平成29年告示）解説特別活動編（平成30年、以下「29年解説特別活動」とする。）に示されている内容（2）のア「自他の個性の理解と尊重、よりよい人間関係の形成」には、「自分の個性をよく知り、自己を高めようとする努力が大切であることを理解するとともに、他者の個性を尊重することを通して、他者への思いやりを深めること」¹⁾の必要性が示されている。また、「自己理解を一層深めるとともに、多様な他者のよさを見付け、豊かな人間関係を育て、共に将来の夢や希望をもって生きていこうとする態度の育成が望まれる。」²⁾と示され、自他共に大切にできる生徒を育成することの必要性が示されている。

特別活動は、自主的、実践的な集団活動を通して身に付けたことを生かし、集団や社会における生活及び人間関係をよりよく形成するとともに、人間

としての生き方についての考えを深め、自己実現を図ろうとする態度を養うことを目指している。このことは、生徒指導の目標である、自己指導能力の育成と重なると考える。

しかし、「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について（答申）」（平成28年、以下「答申」とする。）では、各学校で特色ある取組が進められている一方で、各活動において身に付けるべき資質・能力は何なのか、どのような学習過程を経ることにより資質・能力の向上につながるのかということが必ずしも意識されないまま指導が行われてきた実態が見られるとの指摘もある。

そこで、生徒指導の目標である、自己指導能力の育成を目指し、特別活動において、自分と相手の相互を尊重する生徒を育成することをねらいとした学級活動を中心に、教科・領域相互と関連させた特別活動のカリキュラムを作成し、自他共に大切にできる生徒を育成する生徒指導の在り方を提言する。

II 研究の基本的な考え方

1 自他共に大切にできる生徒の育成

(1) 自己理解と他者理解

有村久春（2003）は、自己理解について、社会的な状況を受け容れ、自らの在り方・生き方を考え行動化していく基盤となるものであるとし、特に生徒指導では、この受容の在り様が子供の行動を規定するところがあると述べている。

中間玲子（2016）は、「自己」とは、他者とは異なる「その人」として捉えられるとし、「ある個人」が「他とは異なるその人であること」が論じられる際に用いられる言葉としている。自己理解は、他者から直接的に自己についての情報を与えられることもあれば日々の経験の中で自己に関わる記憶が蓄積されていくこともあるとし、他者との関わりの中で自己理解が進むことを示している。

福岡市教育センター（平成17年）は、「自他を尊重する態度」は、自分と他者との関係の中でしか育たず、自他を大切にできる態度を育てるためには、自己と他者との関係を見直し、よりよい関係を築くことが必要であると示している。また、他者理解は、自分の価値観と他者の価値観との相違点や共通点を見いだすところから始まり、この他者理解の深まりは、自己理解も深め、こうした内的な作業が自己理解を進め、自尊感情を高めていくと示してい

る。

これらのことから、自己理解と他者理解相互の深まりによって、自尊感情を高めることにつながると考える。

(2) 自他共に大切にできる生徒の育成と自尊感情

国立教育政策研究所（平成27年）は、生徒指導リーフ「『自尊感情』？それとも、『自己有用感』？」において、自尊感情について、自己に対して肯定的な評価を抱いている状態を指すSelf Esteemの日本語訳であり、一般的には、「自己肯定感」「自己存在感」「自己効力感」等と、ほぼ同じ意味合いで用いられていると示している。一方、自己有用感とは、他人の役に立った、他人に喜んでもらったなど、相手の存在なしには生まれてこないものであり、他者からの評価やまなざしを強く感じた上で育まれると示している。図1は、自己有用感と自尊感情の関係を示しており、このように、自己有用感の獲得が、自尊感情の獲得につながるとしている。また、自尊感情が高いことは、必ずしも自己有用感の高さを意味するものではなく、自己有用感に裏付けられた自尊感情が大切であると示している。

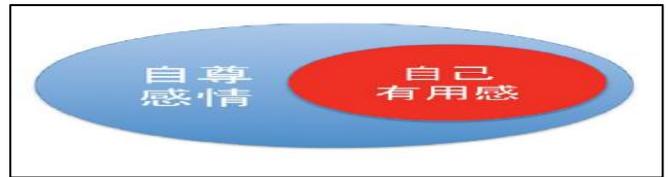


図1 自己有用感と自尊感情の関係³⁾

伊藤美奈子（平成28年）は、広島県立教育センターの専門研修講座において、「自尊感情」について、自分のできること、できないことなど、全ての要素を包括した意味での「自分」を、他者との関わり合いを通して、かけがえのない存在、価値ある存在として捉える気持ちのことと述べている。

片山紀子（2014）は、生徒指導を行う上では、自己有用感をもたせ、自尊感情を高める場面を設定し、積極的な仕掛けをつくっていくことが必要であり、自分たちでできた子供が思えることが自尊感情を高める上では大事であると述べている。

神谷和宏（2017）は、自尊感情を高めるための第一歩として、自分はこのままでいいんだと自分を肯定し、ありのままの自分を受け入れることが必要であると述べている。

また、安藤博（2014）は、自分を肯定的に捉えられてこそ、他者の存在の大切さを理解することができるかと述べている。

これらのことから、自尊感情とは、他者との関わり合いを通して、自分をかけがいのない存在、価値ある存在としてありのまま受け入れることであり、他者との関わり合いを通して高められるものであると捉えた。よって、自尊感情を高めることにより、他者の存在の大切さを理解することができ、自他共に大切にできる生徒を育成することにつながると思われる。

(3) 自尊感情の育成とレジリエンス

小花和Wright尚子（平成26年）は、レジリエンスの基盤は、子供自身が自己を肯定することであり、自己肯定感の育成に必要な働き掛けが、レジリエンスの育成に必要であると述べている。そして、自己を肯定するということは、自分の存在が誰かにあるいは何かにとって貴重であり、そこにいるだけで価値があるのだと感じることであると述べている。

小塩真司（2017）は、自尊感情は、自己に対する肯定的な見方や価値ある存在としての感覚や、自分自身を好ましいと思ったり、有能だと感じたりする自己の評価的側面を反映した概念であり、自尊感情の高さは、自分自身が上手く適応している状態を反映しているとして、レジリエンス特性と重なり合う部分があると述べている。

稿者（平成30年）は、「小学校におけるレジリエンスを育成する指導の在り方—1年間を通した学習プログラムの作成・実施を通して—」（以下、「平成29年度研究」とする。）において、小学校第6学年におけるレジリエンスの学習プログラムを作成・実施した。その結果、心身の変化や不安を抱える小学校第6学年の児童の自尊感情を高めることを含めた、レジリエンスの育成において、レジリエンスに係る学習プログラムの有効性が明らかになった。

また、得能彩子（平成29年）は、小学生においては、感情に係る因子が低くなっていたが、中学生においては、レジリエンスの基盤である因子全てにおいて低い数値を示しており、中学生のレジリエンスの育成には、レジリエンスの基礎づくりが必要であると述べている。

これらのことから、レジリエンスの学習プログラムを活用し、レジリエンスの基礎づくりに取り組むことにより、自尊感情を高め、自他共に大切にできる生徒を育成できると考える。

(4) 自他共に大切にできる生徒の育成とアサーション

平木典子（2009）は、日常生活での身近な家族や

友人との会話や学校などにおいて、人間関係とコミュニケーションの問題は、人々の大きな悩みとなっており、現代人は、自他尊重のコミュニケーションという関わりを切望していると述べている。そして、アサーションは、歩み寄りの精神があり、互いを大切に合ったという気持ちが残る会話であり、そのプロセスでは、より豊かな創意や工夫が生み出され、一人の提案より満足のいく妥協案が探し出せる可能性のある、相互尊重の体験をすることであると述べている。

園田雅代（2010）は、アサーションとは、自分の気持ち・考え・意見・希望などを率直に正直にしかも適切な方法で自己表現することであり、自分と相手の相互を尊重しようという精神で行うコミュニケーションであると述べている。

有村（2003）は、アサーションとは、自分も相手も大切にしたい自己表現であると述べ、自己と他者を公平に尊重することを前提として、自分の考えや欲求、気持ちなどをその場の状況に応じた方法で率直に述べることであり、この具体化によって、自分の考えや感情を表現し、円滑な人間関係の形成を維持することを目的とすると述べている。

足立啓美、鈴木水季、久世浩司（平成26年）は、人は大きく分けて、三つのタイプの人間関係の築き方があるとし、「攻撃的」「非主張的」「自分も相手も尊重する（アサーティブ）」のパターンがあり、良好な人間関係を築き、レジリエンスを育てることにつながるのが、「自分も相手も尊重する（アサーティブ）」パターンであると述べている。

これらのことから、自尊感情を高めると共に、生徒が、自己と他者を公平に尊重する、自分と相手の相互尊重の体験を通して、よりよい自己表現を身に付け、良好な人間関係を築くことが、自他共に大切にできる生徒を育成することにつながると思われる。

2 特別活動と生徒指導

文部科学省（平成22年）は、「生徒指導提要」（以下、「提要」とする。）において、生徒指導は、「一人一人の児童生徒の人格を尊重し、個性の伸長を図りながら、社会的資質や行動力を高めることを目指して行われる教育活動のこと」⁴⁾と示している。また、生徒指導を通して育まれていくべき資質・能力として、自己実現を図るための自己指導能力の育成を目指すこととしている。

この力を高めるためには、問題行動への対応といった消極的な指導ではなく、全ての生徒を対象に

した各自の個性と発達に即して自己実現していくことを支援する積極的な指導をする必要があると考える。

国立教育政策研究所（平成24年）は、生徒指導リーフ「特別活動と生徒指導」（以下、「生徒指導リーフ」とする。）において、特別活動の指導で重視したい指導・支援は、生徒指導を行う際に強調されてきた生徒指導の三機能（自己存在感・共感的な人間関係・自己決定）に他ならず、特別活動は教育課程において、生徒指導の中核的な役割を果たしていると述べている。また、中学校教育課程実践講座特別活動（平成28年）では、生徒指導の充実を図る上で大切にしたい生徒指導の三機能を意識した指導は、生徒による様々な集団活動や実践的な活動が展開される特別活動において、全ての生徒を対象に効果的に展開することが期待できると述べている。さらに、「学級活動は、学級担任によるきめ細かな生徒指導が行われる中核的な場である」⁵⁾とも述べている。これらのことから、特別活動、とりわけ学級活動の充実が生徒指導の充実に資すると考える。

それでは、特別活動を行う際、どのような点に留意すればよいのか。「29年解説特別活動」における学級活動（2）の内容には、ア「自他の個性の理解と尊重、よりよい人間関係の形成」が示されている。指導の際には、「自分の個性をよく知り、自己を高めようとする努力が大切であることを理解するとともに、他者の個性を尊重することを通して、他者への思いやりを深めることが集団生活では重要であることを理解させることが必要である」⁶⁾と示されている。また、「生徒指導リーフ」には、特別活動において、生徒指導の面から重視したい学級活動の取組例を示している。その一部を表1に示す。

表1 重視したい学級活動の取組例（一部）

生徒指導の面	学級活動の取組
「自己存在感」を与える取組	係活動や学級組織の中で、自分のよさや得意なことを生かして活動できるようにする取組
「共感的な人間関係」を育てる取組	互いのよさを認め合い相互の信頼を高め合えるようにする取組
「自己決定」の場や機会を設け、自己実現の喜びを味わわせる取組	よりよい生活の在り方について、その方法や内容などのアイデアについて情報交換し合い、自分に合った具体的な実践課題を決め、努力して改善が図られるようにする取組

これらのことから、生徒指導にとって最も重要な教育活動の場である学級活動において、自己理解や他者理解に係る取組を行い、生徒指導の充実を図ることで、自他共に大切にできる生徒を育成することができると考える。

3 教科・領域と生徒指導

教科・領域と生徒指導について、「提要」には、「各教科等の学習において、一人一人の児童生徒が、そのねらいの達成に向けて意欲的に学習に取り組めるよう、一人一人を生かした創意工夫ある指導を行うこと」⁷⁾と示されている。さらに、児童生徒の意欲的な学習を促し、各教科等のねらいを達成していくことが進路の指導につながり、生徒指導のねらいである社会的な自己実現や自己指導能力の育成にもつなげていくことができると示されている。

「提要」では、「生徒指導は教科指導を充実したものと成り立たせるために重要な意義を持っています」⁸⁾と示されている。教育活動においては①児童生徒に自己存在感を与えること、②共感的な人間関係を育成すること、③自己決定の場を与えることという生徒指導の三機能を生かした授業実践が求められており、この点について、池田隆・北野和則（平成24年）が、学習指導において、生徒指導の三機能を生かした授業実践の有用性について明らかにしている。

「答申」では、「学習指導と生徒指導とを分けて考えるのではなく、相互に関連付けながら充実を図ることが重要」⁹⁾と示されている。また、中学校学習指導要領（平成29年告示）解説総則編（以下、「29年総則」とする。）において、学校教育を通して育成を目指す資質・能力が「知識及び技能」「思考力、判断力、表現力等」「学びに向かう力、人間性等」の三つの柱に整理されたことについて「答申」では、全ての教科等において育む「学びに向かう力・人間性等」が整理されることにより、教科等における学習指導と生徒指導とは目指すところがより明確に共有され、更に密接な関係を有するものになると述べられている。

「学びに向かう力、人間性等」は、「総則」において、次のように例示されている。

- ・主体的に学習に取り組む態度も含めた学びに向かう力
- ・自己の感情や行動を統制する力

- ・よりよい生活や人間関係を自主的に形成する態度等
- ・自分の思考や行動を客観的に把握し認識する、いわゆる「メタ認知」に関わる力
- ・多様性を尊重する態度や互いのよさを生かして協働する力
- ・持続可能な社会づくりに向けた態度
- ・リーダーシップやチームワーク、感性、優しさや思いやりなどの人間性等に関するもの

学びに向かう力、人間性等

これらは、社会や生活の中で生徒が様々な困難に直面する可能性を低くしたり、直面した困難への対処方法を見いだしたりできるようにすることにつながる重要な資質・能力であり、「提要」で示されている生徒指導のねらいと同様のものであると考える。

これらのことから、教科・領域と生徒指導は、互いに切り離されて存在するのではなく、一体として捉えるべきものであると考える。

4 教科・領域相互と関連させた特別活動のキャリアム

「29年解説特別活動」では、「生徒一人一人の資質・能力の育成という視点だけでなく、学びに向かう主体的で協働的な集団づくりという視点からも、各教科等の学習と、特別活動は、互いに支え合い、高め合う関係にある」¹⁰⁾と示されており、各教科等で「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善を行うためには、生徒が失敗を恐れずに行動することができたり、他の生徒と互いの考えを伝え合ったり協力し合ったりすることができるような、学級における生徒同士の人間関係や、教師と生徒の信頼関係が必要であり、特別活動を通じた学級経営の充実も重要であると示されている。また、特別活動において、実生活上の課題解決に各教科等で育成された資質・能力を活用することで、思考力、判断力、表現力等が育成され、知識や技能が実感を伴って体得され、各教科等を学ぶ意義の理解が深まっていき、特別活動の充実により各教科等の「主体的・対話的で深い学び」が支えられるという関係にあると示されている。

これらのことから、本研究における、教科・領域相互と関連させた特別活動とは、自他共に大切にできる生徒を育成するために、特別活動

において生徒同士の人間関係を育み、自尊感情を育成し、そこで育まれた資質・能力が各教科等の「主体的・対話的で深い学び」を支えることであると捉える。

また、東京都教職員研修センターは、各教科等の指導の中で生徒の自尊感情や自己肯定感を高める方法として、「学習内容」で高める方法と、「指導方法」で高める方法の二通りを示し、具体例を表2のように示している。

表2 各教科等の指導で自尊感情や自己肯定感を高める方法

「学習内容」で高める	<ul style="list-style-type: none"> ・自己の成長を振り返る学習 ・自己の個性を発見する学習 ・生命の尊さを考える学習 ・友情の尊さについて考える学習 ・主体的に進路を考える学習 ・成就感や連帯感を味わえる学習 ・他者と協力することの大切さを学ぶ学習
「指導方法」で高める	<ul style="list-style-type: none"> ・友だちと関わりながら学ぶ学習形態や学習方法の工夫 ・主体的に取り組める教材・教具の工夫 ・学習の成果を自ら実感できる評価の工夫 ・地域と関わりながら学ぶ体験活動の工夫

これらのことを踏まえ、特別活動で培った資質・能力を教科等の指導に生かすためには、「学習内容」や「指導方法」で関連させることが必要であると考え。本研究では、これらのことを踏まえた教科・領域相互と関連させた特別活動のキャリアムを開発し、特別活動の学習プログラムの実施を通して、自他共に大切にできる生徒を育成する学習プログラムの有効性について検証する。生徒指導と教科・領域との関係を図2に示す。

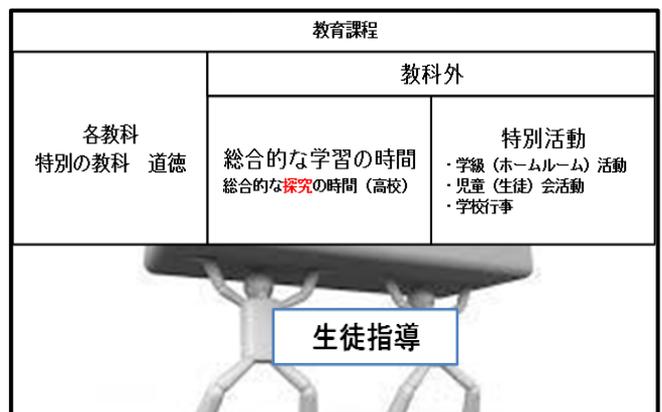


図2 生徒指導と教科・領域との関係¹¹⁾

Ⅲ 研究の目的

本研究は、自尊感情を高めることをねらいとした活動を中心に、教科・領域相互と関連させた特別活動のカリキュラムを開発し、実践することを通して、自他共に大切にできる生徒を育成する生徒指導の在り方を提言することを目的とする。

Ⅳ 研究の内容及び方法

本研究では、まず、研究協力校の生徒を対象に、自他を大切にすること意識に係る事前調査（1回目調査）を行う。次に、自他共に大切にできる生徒の育成を目標とした特別活動の内容を検討し、研究授業を実施する。研究授業は、「平成29年度研究」において作成した、小学校第6学年におけるレジリエンスの学習プログラムを中学生に適したものに改善し、自他を大切にすることに係る特別活動4時間の学習プログラムを開発する。また、研究授業後に事後調査（2回目調査）を行い、事前・事後調査結果の比較により、特別活動を中核とした教科・領域相互とのつながりを意識したカリキュラムの有効性を分析する。さらに、教科・領域相互の関連を図るために、教科における、自他共に大切にできる生徒の育成に関連した授業を提案する。

Ⅴ 研究の仮説と検証

1 研究の仮説

教科・領域相互の関連を踏まえた特別活動の学習プログラムを実施すれば、自他共に大切にできる生徒を育成することができるであろう。

2 検証の視点と方法

検証の視点と方法を表3に示す。

表3 検証の視点と方法

検証の視点	検証の方法
特別活動の学習プログラムが、自他共に大切にできる生徒の育成に効果があったか。	<ul style="list-style-type: none"> 研究授業前後における質問紙調査結果の比較 ワークシートの記述 教師への聞き取り

Ⅵ 学習プログラムの開発

「平成29年度研究」で作成した、小学校におけ

るレジリエンスに係る学習プログラムを図3に示す。

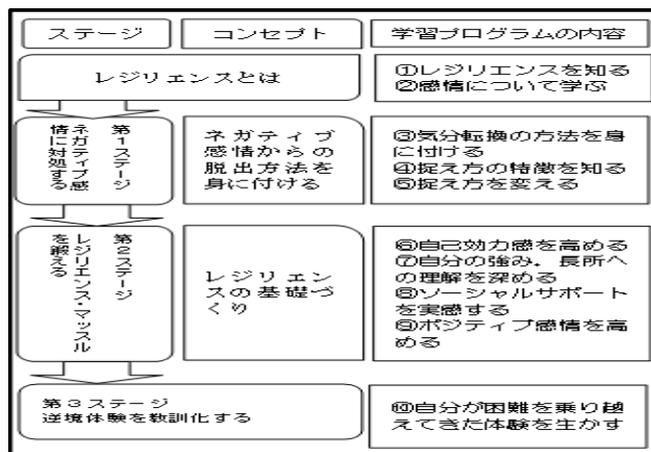


図3 レジリエンスに係る学習プログラム

このプログラムをベースに、中学生に適したものに改善し、自他共に大切にすることに係る特別活動4時間の学習プログラムを表4のとおり開発した。

表4 自他共に大切にできる生徒を育成する学習プログラム

時	題材名	テーマ	資質・能力
1	自分の感情を知ろう	自分の感情を知る	回復力・耐える力
2	自分のことを知ろう	自己理解	主体性・積極性 自己理解・自らへの自信
3	自分のサポーターを知ろう	他者理解	多様性に対する適応力
4	自分も友だちも大切に話す方を知り、よりよい日常生活を送ろう	自他共に大切にす	コミュニケーション能力 協調性・柔軟性

本研究における研究授業第1時に、自分の感情について理解する内容を作成、次に、図3に示すレジリエンスに係る学習プログラムの、⑥及び⑦の内容が自己理解、⑧の内容が他者理解と捉え、第2時及び第3時とした。そして、第4時に新たに、アサーションに係る自他共に大切にできる学習内容を設定した。なお、それぞれのテーマに関連する資質・能力については、広島版「学びの変革」アクション・プランを参照した。

Ⅶ 実態調査

1 実態調査の方法

(1) 質問紙

伊藤美奈子ら（2017）は、奈良県教育委員会と連携し、奈良県の小中学生を対象に、14因子45項目からなる、「こころと学校生活等に関するアンケート2018」を作成し、実施している。この調査は、次の内容から構成されている。この調査結果は、4段階評定尺度法による数値とともに、12,000人ほどを対象とした偏差値でも表されている。

- ① 自尊感情（自分に対する満足感や自分を大切に思う気持ち）
- ② 学校適応や家庭での居場所感
- ③ こころの問題の有無（不登校・いじめ・抑うつ・発達の偏り）
- ④ 生きる力（生きる意欲・コミュニケーション力、レジリエンス）

「こころと学校生活等に関するアンケート2018」調査内容の構成

本研究においては、主に、自尊感情に係る実態を把握する。特別活動の授業の実施における事前・事後の生徒の変容を見取るため、また、特別活動における取組について更に検討するため、伊藤ら（2018）が作成した45項目のアンケートを生徒に対して実施する。

(2) 実施時期、実施方法及び対象者

- 実施日 1回目 平成30年5月
（第1回研究授業実施前）
- 2回目 平成30年12月

- 対象 表5に示す。

表5 研究協力校における対象生徒数等

研究協力校	学年	学級数（学級）	生徒数（人）
竹原市立竹原中学校	第1学年	3	63
海田町立海田中学校	全学年	14	520

- 方法 奈良県「こころと学校生活等に関するアンケート2018」4段階評定尺度法

- 構成 45項目

(3) 質問内容

次に、質問内容例を示し、カテゴリーについては、表6に示す。

- ・私は自分のことが好きである
- ・私には自分のことを理解してくれる人がある
- ・人と違っていても自分が正しいと思うことは主張できる
- ・自分の気持ちや考えをうまく表現できるほうだ
- ・人とのつきあいがうまいほうだ
- ・挫折（失敗やつまずき）から立ち直るのは早いほうだ
- ・私は悲しい気持ちになることが多い

質問内容例

表6 カテゴリー

カテゴリー	因子
自尊感情	自己評価・自己受容
	関係の中での自己
	自己主張・自己決定
学校適応	教師関係
	友人関係
	学力
	学校好き
	いじめなし（反転）
家庭適応	家庭の居心地
こころの状態	生きる意欲
	コミュニケーション
	レジリエンス
	情緒安定（反転）

2 1回目調査の結果と考察

(1) 竹原市立竹原中学校

1回目調査の結果は、図4のとおりであった。偏差値は50を超えているものの、「自己評価・自己受容」及び「自己主張・自己決定」の自尊感情に係るカテゴリーが低くなった。

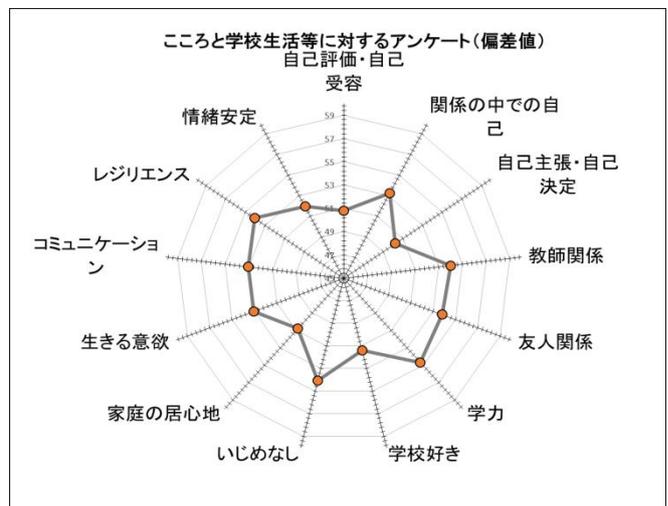


図4 竹原市立竹原中学校1回目調査結果

(2) 海田町立海田中学校

1 回目調査の結果は、図5のとおりであった。偏差値は、「家庭の居心地」や「学校好き」など、50を下回る項目があり、「自己評価・自己受容」及び「自己主張・自己決定」の、自尊感情に係るカテゴリーが低くなった。

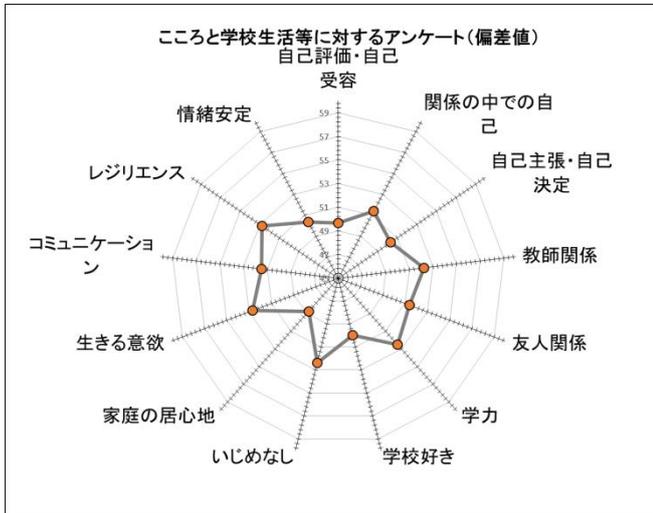


図5 海田町立海田中学校 1 回目調査結果

2 校の 1 回目調査から、「自分」を、他者との関わり合いを通して、かけがえのない存在、価値ある存在として捉える気持ちである自尊感情に課題があると考えられる。

VIII 研究授業

1 研究授業の実施計画

- 期 間 平成30年10月～12月
- 対 象 研究協力校における対象生徒
- 構 成 学級活動（2）（全4時間）

2 研究授業全体の流れ

研究授業の全体計画を表7に示す。

表7 学習プログラム全体計画

時	題材名	内容	資料
1	自分の感情を知ろう	レジリエンスについて理解し、ネガティブ感情からの脱出方法について考え、日常生活で生かそうとする。	・指導提示用スライド資料 ・指導用原稿
2	自分のこと	自分の個性を多角	・ワーク

	を知ろう	的に見つめるとともに、肯定的に捉え、生かすことができる場面を具体的に考えることができる。	シート
3	自分のサポーターを知ろう	自分を支えてくれる人の存在に気づき、それぞれのよさを発揮しながら協力してよりよい日常生活を築こうとする。	
4	自分も友だちも大切に話す話し方を知り、よりよい日常生活を送ろう	互いのよさを生かし、共に高め合う日常生活の送り方を具体的に考えることができる。	

研究授業において、研究協力校が同一の内容で実施できるよう、資料を作成した。研究授業1時間分の指導内容について、生徒が視覚的に理解しやすいように、指導提示用スライド資料及びスライド資料に合わせた指導用原稿を作成し、各研究協力校に配付した。また、指導内容に応じたワークシートを作成し、配付した。

指導提示用スライド資料を活用して授業を実施する際、生徒が自分事として捉えやすいよう、生徒実態に応じた事例をいくつか提示した。また、授業の終末には、学習を振り返らせ、実践目標等を自己決定させる場面を設定した。

3 研究授業の実際

(1) 第1時「自分の感情を知ろう」

感情に係る具体例を基に、感情にはポジティブ感情とネガティブ感情があることを理解させ、落ち込んだ状態、逆境や困難から立ち直っていく力であるレジリエンスについてイメージをもたせるとともに、ネガティブ感情からの脱出方法を具体的な事例を通して考えさせる構成とした。

まず、レジリエンスをイメージさせるために、「友だちから借りた本を汚してしまい、謝りづらくなり、友だちの輪にも入りづらくなった。」という、生徒の日常生活において起こり得る場面を、気持ちが落ち込み続ける曲線とともに提示した。この気持ちの落ち込みから脱出し、逆境や困難に負けな

いで、立ち直っていく力のことをレジリエンスであると示した。

次に、ネガティブ感情は、人が生きていくために必要な感情であるものの、身体や心に悪影響を与え、悪循環を起こすという特徴があることを理解させた上で、ネガティブ感情の悪循環からの脱出方法を具体的な事例を通して考えさせた。また、呼吸法や気分転換とともに、出来事を前向きに捉えることにより、ネガティブ感情から脱出することができることを理解させた。

(2) 第2時「自分のことを知ろう」

人には、長所と短所があり、短所の見方を変えると長所になることを理解させるとともに、お互いの長所を伝え合うグループ活動を通して、自分の長所を知る構成とした。

まず、「しつこい」「取りかかりが遅い」「すぐに諦めてしまう」などの短所を提示し、見方を変えて長所にする演習を通して、自分の長所を考えさせた。

次に、班のメンバーの長所を付箋に書き出し、付箋を交換しながら長所を伝え合う活動を行い、自分では気付いていない長所に気付かせていった。また、長所は、自分の「強み」であり、この「強み」を生かすことによって、逆境や困難から立ち直ったり、周囲の友だちを支えたりすることができることを理解させた。

(3) 第3時「自分のサポーターを知ろう」

自分の周りにいる、支えてくれる人、助けてくれる人、応援してくれる人などが「サポーター」であることを理解させ、サポーターマップの作成を通して、自分の周りの様々なサポーターの存在に気付かせる構成とした。

まず、「サポーター」をイメージさせるために、自分の「サポーター」となり得る人をワークシートに書き出させた。

次に、自分を中心とした円に、家族、友だち、周りの大人などの誰が、自分に、どのようなことをしてくれる存在なのかを記入させ、サポーターマップを作成させた。このことを通して、日頃気付いていない自分の「サポーター」に気付かせ、自分が周囲の様々な人に支えられていることを実感させた。

(4) 第4時「自分も友だちも大切に話す話し方を知り、よりよい日常生活を送ろう」

自己表現に係る具体例を基に、自己表現には「非主張的」「攻撃的」「アサーティブ」の自己表現があることを理解させ、自分も相手も大切にすため

の方法を、友だちとのトラブル回避などの具体的な事例を通して考えさせる構成とした。

まず、アサーティブな自己表現のよさを実感させるために、「友だちに借りていた本を返す際、友だちから『本を汚したのは、きみじゃないのか?』と疑われた。」という場面において、「非主張的」「攻撃的」「アサーティブ」に答える三つのシナリオを示し、ロールプレイを行わせた。

次に、生徒の日常生活において起こり得る同調圧力(ピア・プレッシャー)に係る場面を提示し、自分も相手も大切にするためには、どのように対処すればよいか、アサーティブな自己表現を踏まえて考えさせた。

IX 結果と考察

1 竹原市立竹原中学校

(1) 1回目及び2回目調査の分析結果

第1学年A組、B組及びC組の、各1回目及び2回目調査の結果を次の図6、7及び8に示す。なお、C組は同様に2回目調査を実施したが、研究授業は、3学期に実施する予定である。

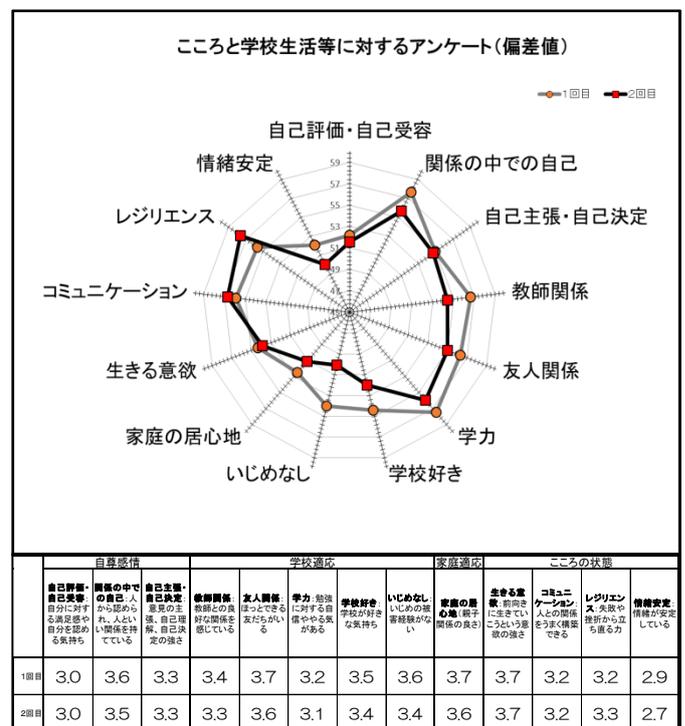


図6 A組の1回目及び2回目調査の結果

図6では、全体的に、2回目調査の方が、内側になり、数値が下がった。しかし、本学習プログラムで重視した、「自己評価・自己受容」「自己主張・自己決定」の自尊感情及び「レジリエンス」に

関わる項目においては、本学習プログラムを実施したA組及びB組は、数値が上昇した、あるいは変化がなかった。一方で、学習プログラム実施前のC組については、自尊感情及びレジリエンスに関わる項目のいずれの数値も下がった。

授業後の、生徒のワークシートの記述の内容を次に示す。

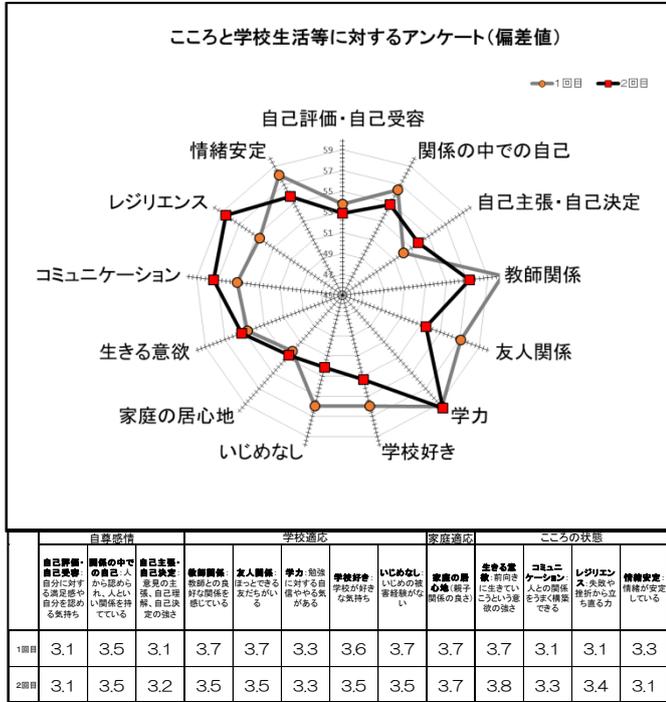


図7 B組の1回目及び2回目調査の結果

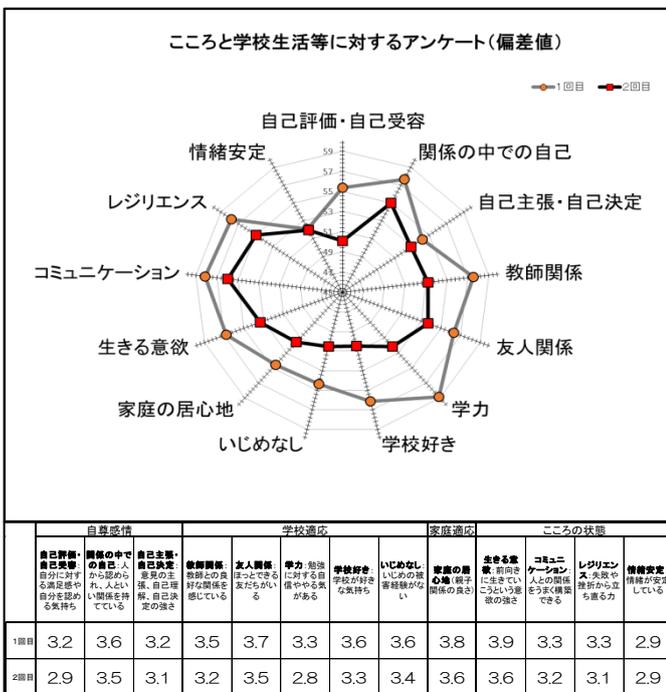


図8 C組の1回目及び2回目調査の結果

- 他の人のよいところを見付けると、自分も嬉しい気持ちが伝わってきました。
- 自分では気付けない長所を友だちが教えてくれると嬉しくなったので、自分も友だちの長所を見付けていきたい。
- いいことを書いてくれたので、そのことを思いながら行動したいと思います。
- 相手が嬉しそうにしていたから、自分も嬉しくなった。いつもは言えないよいところを言うことができたので、相手にもよいところをこのまま続けてほしいと思った。
- 支えてくれる人は、いっぱいいると感じました。だから、一人で抱え込まずに、いろいろな人と相談していきたいと思います。
- 自分をサポートしてくれる人がこんなにたくさんいたのに驚いた。また時間があれば、他にももっと気付けたと思う。自分に関わりのある人をもっと増やしていきたい。
- 自分には大切な人がいるし、これからもいろいろなことに挑戦していきたいと思いました。
- 自分は当たり前と思って生活しているけど、実際はたくさんの人のおかげで楽しく過ごせているんだということが分かりました。
- これからは、自分が誰かの心を支えることができる人になっていきたい。
- 自分のレジリエンスが高くなってきたことを感じました。
- 相手の気持ちを考えた伝え方をすることで、自分も相手も嫌な気持ちにならずに楽しく生活することができる。
- 互いの気持ちを分かり合うのは大事なんだなと思いました。

竹原中学校生徒のワークシートの記述



授業の様子

(2) 授業後の生徒の変容

ア 生徒の記述

生徒は、本学習プログラムの学習を通して、レジリエンスの高まりを感じていたり、相手の気持ちを考えることができたりするなど、自他共に大切にす態度の変容がうかがえた。

イ 研究授業を担当した教師からの聞き取り

研究授業を担当した教師に対して、各時間ごとに、具体的な生徒の言動を含めた成果と課題について聞き取りを行った。その聞き取りの内容を表8に示す。

表8 竹原中学校授業担当教師からの聞き取り

題材名等	成果	課題
第1時 「自分の感情を知ろう」	<ul style="list-style-type: none"> 生徒は、例題で感情を考えていくことで、自分の感情を知り、ネガティブ思考にならないような自分なりのリラックス方法を考えることができた。 自分の気持ちを整理し前向きに考えていく大切さを学ぶことができた。 相手に合った接し方をしようとする姿が見られた。 	<ul style="list-style-type: none"> 日常生活の場面で、本授業と関連させる場面設定を十分にできなかった。 授業の中で、例題を基に、自分のこととして考える時間を十分に確保することができなかった。
第2時 「自分のこころを知ろう」	<ul style="list-style-type: none"> 授業の中で、職員から自分のよさを伝えてもらうことで、嬉しそうな姿が見られた。また、総合的な学習の時間や道徳の時間で自分のよさを考える際にも、友だちに伝えてもらったことを基に、考えることもできていた。 自分を見つめるだけでなく、友だちのよさを見 	<ul style="list-style-type: none"> 授業の中で、生徒の発言をより深めたり、発言を次につなげたりするような発問をすることができなかった。 日常生活の中で生かす場面設定は十分にできていない。

	つけようとする姿も見られた。	
第3時 「自分のサポーターを知ろう」	<ul style="list-style-type: none"> 生徒の記述から、たくさんの人に支えられて生きていること、たくさんの人に感謝して生活していきたいという言葉が多くあり、日常生活で生かそうとする姿勢が見られた。 道徳の時間や帰りの短学活の場面でも自分のサポーターに関する発言が見られた。 	<ul style="list-style-type: none"> 授業を終え、生徒が個人思考で考えた、自分を支えてくれる存在だけでなく、さらに、友だちの意見を参考にした上で、自分にはこのような存在もいると広げ、気付かせていくことも必要だったと思う。
第4時 「自分も友だちも大切にする話し方を、より、よい日常生活を送ろう」	<ul style="list-style-type: none"> 自分の意見も伝え、相手の意見も聞くという記述が見られ、自分も大切にし、相手も尊重した考え方を学ぶことができた。 本授業だけでなく、道徳の時間で、「アサーティブな考え方や対応をしたらいい」という発言があり、生徒が生活の中で生かそうとする姿が見られた。 	<ul style="list-style-type: none"> 授業の中で、実際の日常生活での場面を思い浮かべさせ、例題を考えていくことにとどまらず、自分のこととして考えるような発問、場面設定を行うことで、より生徒の思いを深められたと思う。

研究授業を担当した教師からの聞き取りから、特別活動において実施した学習プログラムで学習したことが、総合的な学習の時間や、道徳の時間の学習の中での生徒の発言に生かされている様子が見られた。一方で、日常生活の中で、学習したことを生かす姿は、あまり見られなかった。

(3) 考察

本学習プログラムを実施したA組及びB組については、2回目調査の方が、全体の数値は下がったものの、自尊感情及びレジリエンスの項目は上昇したことから、自他共に大切にす生徒を育成するこ

とにつながったと考える。このことから、本学習プログラムのテーマである「自分の感情を知る」「自己理解」「他者理解」及び「自他共に大切にできること」を学習したことにより自尊感情を高めることができたと考える。また、C組については、この期間内に本学習プログラムの実施には至らなかった。A組・B組・C組ともに、1回目調査よりも2回目調査の方が数値が下がっているのは、中学校に入学したときの自信ややる気が、実際の中学校生活を送る中で現実を知り、そのことにより、自尊感情が次第に低下したと考える。C組と比べて、A組・B組の下落具合が小さいのは、本学習プログラムが効果的であったためであると考えられる。なお、授業者への聞き取りの内容に、本学習プログラムを生かした生徒同士の声掛けや発言が見られたことから、相手を尊重しようとする態度が高まったと考える。このことから、本学習プログラムの実施が自他共に大切にできる生徒の育成に有効であったと考える。



生徒同士で交流する様子

2 海田町立海田中学校

(1) 1回目及び2回目調査の分析結果

第1学年、第2学年及び第3学年の質問紙調査の結果を次の図9、10及び11に示す。

第1学年については、2回目調査の方が、内側になっており、数値が下がった。しかし、本学習プログラムで重視した、「自己評価・自己受容」「関係の中での自己」「自己主張・自己決定」の自尊感情及び「レジリエンス」に係る項目については、大きな変化は見られなかったものの、他の項目と比較すると、大きな低下は見られなかった。

第2学年については、全体的に大きな変化は見られない。本学習プログラムの効果があったかどう

かは、この質問紙調査の結果からは、確認することはできなかった。

第3学年については、全ての項目において、1回目調査よりも2回目調査の方が大きくなっており、数値が上昇した。特に、今回の学習プログラムで重視した、「自己評価・自己受容」「関係の中での自己」「自己主張・自己決定」の自尊感情及び「レジリエンス」に係る項目については、上昇が見られた。

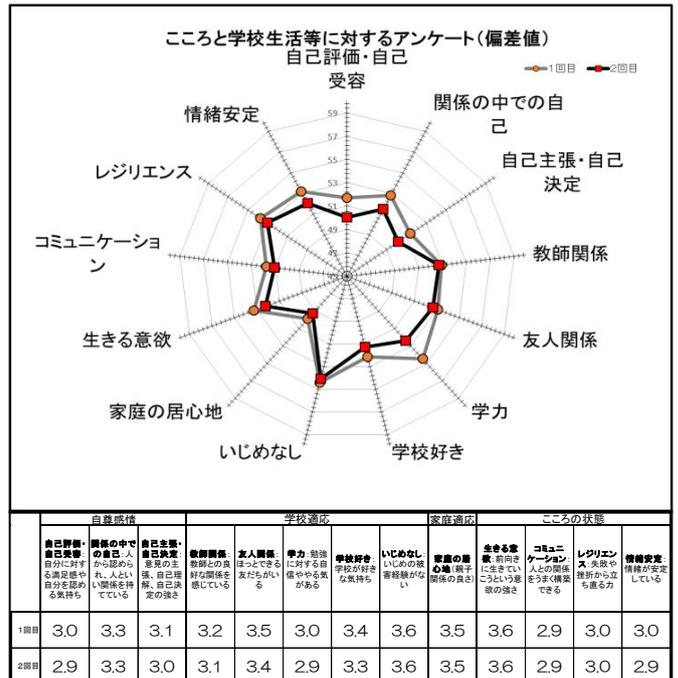


図9 第1学年の質問紙調査の結果

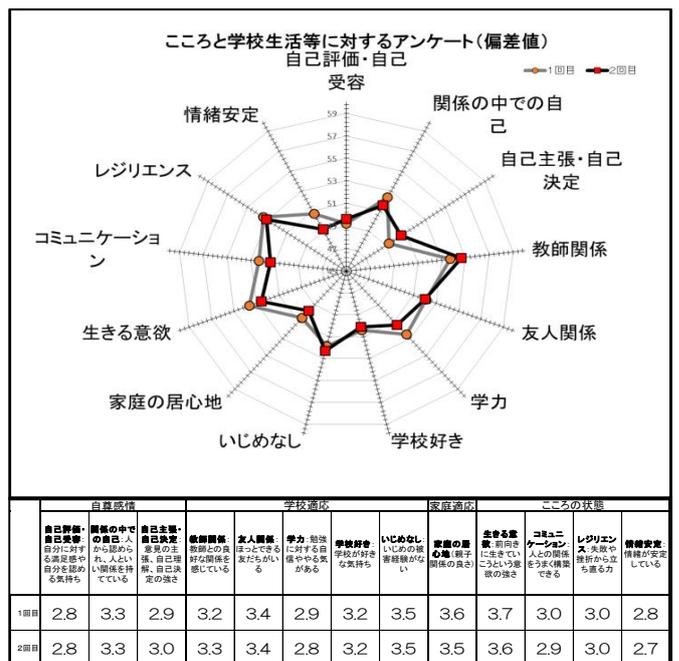


図10 第2学年の質問紙調査の結果

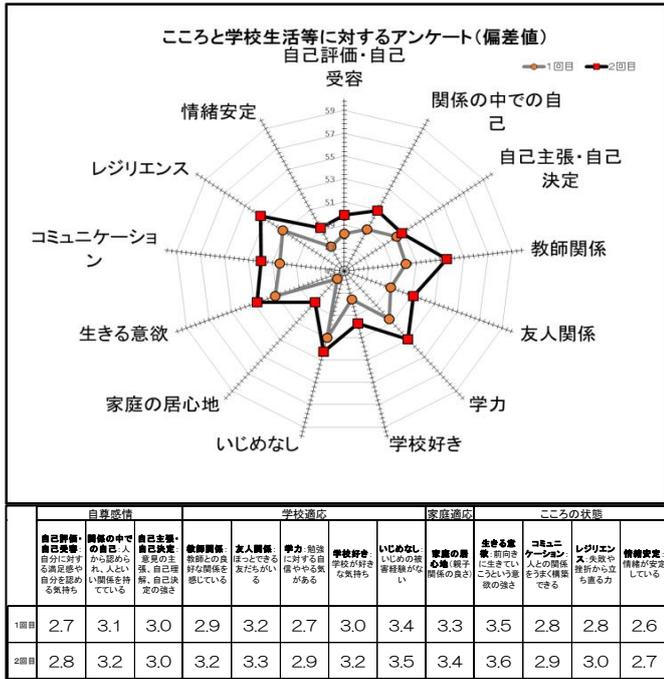


図 11 第 3 学年の質問紙調査の結果

サポーターになりたいと思った。

- 話し方にはいろいろな種類があって、少しの言葉で相手を傷つけてしまうこともあるんだなあとと思った。人と話すときは、アサーティブのように、人の気持ちを考えて発言できるようにしたいと思った。
- 自分と相手のことを考えながら発言するのは難しいと思った。
- 自分も相手も納得できる話し方ができるようにしたい。
- これから友だちと話すとき、相手のことを考えるように心がけようと思った。

海田中学校生徒のワークシートの記述

生徒は、本学習プログラムの学習を通して、レジリエンスの高まりを感じていたり、相手の気持ちを考えることができたりするなど、自他共に大切にす態度の変容がうかがえた。

(2) 授業後の生徒の変容

ア 生徒の記述

授業後の、生徒のワークシートの記述の内容を次に示す。

- 考え方次第で、気持ちが変わるんだなと思いました。私もネガティブな気持ちになったら、運動や音楽を聴くなど試してみようと思いました。
- 人の長所やよいところなど、あまり考えたことがなかったので、気付けてよかった。
- あまり話したことがない人が、こんなふうに思っていたんだと思った。なんかすごいなあとと思った。自信をもって言えるように頑張ります。
- 自分が頑張っていたことを見てくれていた人がいることが分かって、とてもうれしかった。
- 人にはいろいろな考え方があると思った。客観的に自分を見ることができた。
- 普段何気なく接している友だちにも、たくさん長所があることに気付かされた。
- 自分は、たくさんの人に支えられているんだと思った。誰かをサポートできたらうれしい。
- 自分が生きていくために、いろいろなサポートをしてくれる人がいてくれたので、みんなに感謝している。私もサポートできるようになりたい。
- とてもたくさんの人に応援してもらったり助けてもらったりしていると思った。これからも、サポーターの人たちを大切にしながら、自分も誰かの



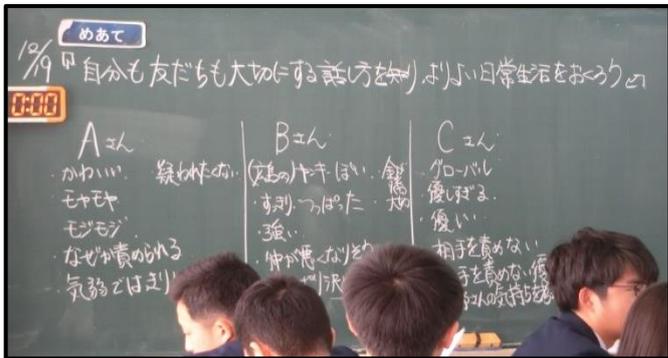
ロールプレイをする生徒の様子

イ 研究授業を担当した教師からの聞き取り

研究授業を担当した教師に対して、各時間ごとに、具体的な生徒の言動を含めた成果と課題についての聞き取りを行った。その内容を表 9 に示す。

表 9 海田中学校授業担当教師からの聞き取り

題材名等	成果	課題
第 1 時 「自分の感情を知ろう」	<ul style="list-style-type: none"> レジリエンスという言葉の定着が見られた。生徒の中に、誰もがネガティブな感情に陥ることがあり、そこから脱出しようとしているのだという実感がわいた。 	<ul style="list-style-type: none"> スライドが多く、説明に終始してしまった部分があった。 ワークシートを使って、自分自身のことについて考えさせる時間の確保が不十分だった。

	<ul style="list-style-type: none"> 生徒は、レジリエンスという言葉を知り、自分の感情について振り返ることができた。日常でもレジリエンスという言葉を使っている生徒がいた。 			<p>ニケーションの不足が心配される生徒もいた。</p> <ul style="list-style-type: none"> どのような言い方がよいか考えきれずにいる生徒に対するフォローが不十分だった。 コミュニケーションの方法が頭では分かっているが、どう実践したらよいか不安をもっていった生徒も少なからずいた。 ワークシートの使い方に分からないところがあった。 導入部分と展開部分がうまくつなげられなかった。 レジリエンスとの関連が教師自身理解できておらず、レジリエンスとのつながりにまで発展させられなかった。
第2時 「自分のことを知る」	<ul style="list-style-type: none"> 周囲から自分のよさを伝えてもらうことで、自分の気付かない良い点を知ることができた。 一つの事象もポジティブに捉えようと、自分の感情も安定すると知ることができた。 自分を知らぬことの大切さがよく分かった。 他者に自分のよさを教えてもらう場があったので、生徒は嬉しそうにしていた。他者に言われた長所は恥ずかしがらずに受け入れられており、面接練習等でも自信をもって言えた。 	<ul style="list-style-type: none"> 付箋の内容が、具体性に欠けたり、同じような内容に偏ったりしている班があった。より具体的な例を提示して取り組ませるとよかった。 自分を知って、それを具体的にどのように生かしていくかについて具体的に思い浮かばない生徒もいた。 自分のよさを書けない、言えない生徒もいた。 	第4時 「自分も友だちも大切に話し方を知り、より日常生活を生きる」	<ul style="list-style-type: none"> 言葉の使い方で互いが気持ちよく生活できることを知ることができた。 自他共に認め合うことの大切さを学ぶことができた生徒が多かった。 アサーティブな表現をすることによって、受け手の捉え方（印象）が大きく変わることが認識できた。 言い方、伝え方について考えることで、日常での人との関わりについて考えることができた。
第3時 「自分のサポーターを知る」	<ul style="list-style-type: none"> 客観的に自分のサポーターを知ることができ、周囲に支えられて生きていることに気付いた。 支えてくれる人と自分の事を知ることの関連性を発見できた生徒が多かった。 	<ul style="list-style-type: none"> 友人に対するサポートの意識はあっても、地域の人からのサポートを感じている生徒は少ないと感じた。 サポーターが思い浮かばない、家庭での会話がなく家族をサポートと認識できないなど、家庭内でのコミュ 		

第4時の板書

本学習プログラムの実施を通して、生徒は、自分の感情について考えたり、自分のよさについて考えたりすることができた。また、他者から聞いた自分のよさを受け入れ、面接等で自分のよさとして話

すことができた。さらに、日常での他者との関わりの中で、相手に対する言い方、伝え方を考えることができた。一方で、自分のことを知ることはできたものの、そのことを具体的にどのように生かしていくかについては、思い浮かばない生徒、自分のサポーターが思い浮かばない生徒、コミュニケーションの方法は分かっても、どう実践したらよいか分からない生徒など、実際の日常生活の場面で、学習したことを生かすことが難しい生徒も見られた。

ウ 教師による生徒の変容の見取り

実際に授業実践を行った教師が、本学習プログラムの有効性を感じているのかといったことを見取る必要があると考え、海田中学校では、教師にも生徒の質問紙調査実施と同時期に、「こころと学校生活等に関するアンケート2018」への回答を求めた。各項目について、「それぞれの生徒が各アンケート項目についてどのような回答をしているか」という視点での回答の結果を、次の図12に示す。

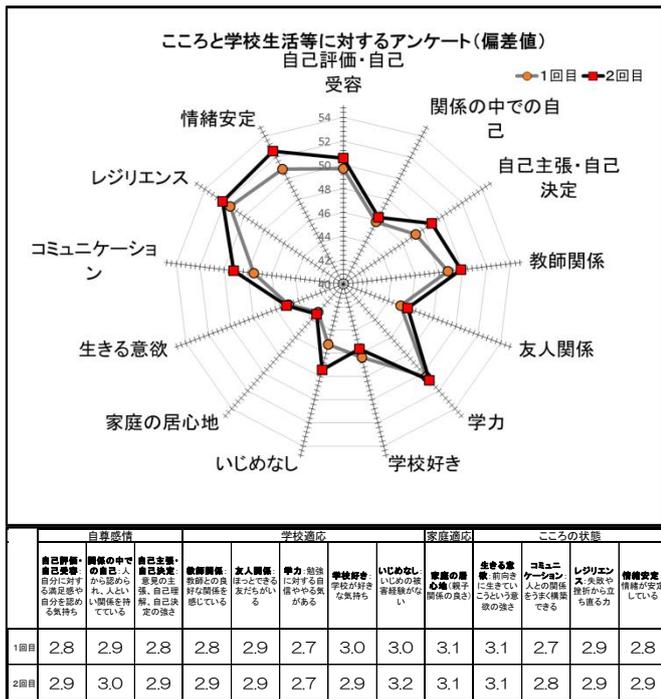


図12 教師による生徒の変容の見取り

教師による生徒の変容の見取りでは、2回目調査の結果の方が、ほぼ全ての項目において、数値が上昇した。特に、本学習プログラムで育成を目指した自尊感情に係る項目についての数値が上昇しており、教師自身が本学習プログラムの実践を通して、生徒の自尊感情の高まりを実感していると考えられる。

(3) 考察

海田中学校では、本学習プログラムを全学年及び全学級で実施した。第1学年については、2回目調査の方が数値が下がったものの、自尊感情及びレジリエンスの項目は上昇したことから、自他共に大切にしている生徒を育成することにつながったと考える。このことは、本学習プログラムのテーマである「自分の感情を知る」「自己理解」「他者理解」及び「自他共に大切にできること」を学習したことにより、自尊感情を高めることができたことと捉えることができる。しかし、中学校に入学したときの自信ややる気が、実際の中学校生活を送る中で、できなくなってしまったという経験を積み、数値が下がったと考える。

第2学年については、大きな変化が見られなかったため、この結果から本学習プログラムの効果については、確認することはできない。

第3学年については、自尊感情及びレジリエンスの項目の上昇が見られたことから、自他共に大切にしている生徒を育成することにつながったと考える。第3学年になると、進路等、次の目標が見えてきて、それに向かっていく段階であり、本学習プログラムで学習した内容について、自分を見つめ、実際の生活場面で生かせることが多く、本学習プログラムの効果がより強く表れたと考える。

また、生徒の変容について、教師に聞き取りをしたところ、「言葉遣いについて相手のことを意識して話す生徒が増えたように感じる」ことや、「自分の強みに気付いたり、友だちから言われたりして言葉にして言える生徒が増えてきた」ことなどが挙げられており、本学習プログラムの内容を生かした発言や相手を尊重しようとする態度の高まりからも、本学習プログラム実施が有効であったと考える。

さらに、教師による生徒の変容の見取りから、教師が、生徒の自尊感情の高まりを実感しており、本学習プログラムの有効性を感じることができていたと考える。

X 学習プログラムと教科・領域との関連に係る提言

1 学習プログラムと年間指導計画との関連

本学習プログラムを効果的かつ無理なく実施するために、本学習プログラムのテーマに係る資質・能力を踏まえ、学級活動及び理科を例として年間指導計画と関連付けたものを表10に示す。

表10 学習プログラムと年間指導計画との関連

時	題材名	テーマ	資質・能力	学級活動		理科
				題材名	ねらい	
1	自分の感情を知ろう	自分の感情を知る	回復力・耐える力	中学生としての目標をもとめる	中学生としての目標をもたせ、ネガティブ感情と向き合いながら、達成に向けて努力しようとする意欲を育てる。	
2	自分のことを知ろう	自己理解	主体性・積極性 自己理解・自らへの自信	班・係活動で自分のよさを生かそう	自分のよさや個性を生かす班・係活動の分担や具体的場面を考えさせる。	
3	自分のサポーターを知ろう	他者理解	多様性に対する適応力	仲間とともに、体育大会（文化祭）に向けて取り組もう	自分を支えてくれる人の存在に気付かせ、自分もよさを発揮し支え合いながら活動しようとする意欲を育てる。	
4	自分も友だちも大切に話す方を知り、よりよい日常生活を送ろう	自他共に大切にす	コミュニケーション能力 協調性・柔軟性	体育大会（文化祭）を振り返ろう ※学期ごとの振り返りにも活用できる。	学校行事を振り返り、互いのよさを生かし、高め合う人とのかかわり方を考えさせる。	【生命の尊さについて考える学習】 ・生物と細胞 ・生物の成長と殖え方 ・遺伝の規則性と遺伝子 ・生物の種類の多様性と進化 ・自然の恵みと災害

本学習プログラムの学級活動の授業（1単位時間）においても、本学習プログラムのテーマである「自己理解」「他者理解」「自他共に大切にす」を、教師が意識して指導することで、より指導の効果は高まると考える。学級活動1単位時間の中で、本学習プログラムのテーマを扱う際の指導の工夫を、表11のように稿者が整理した。

また、表11に示した指導の工夫を取り入れた学級活動（1単位時間）の授業展開を「広島県教育資料」（平成29年）を基に作成した。図13に示す。

表11 学級活動における指導の工夫

本学習プログラムのテーマ	指導の工夫
自己理解	・自分のよさ、課題を多角的に見つめさせる。
他者理解	・他者のよさや支えに目を向けさせる。 ・自他のよさや課題を生かす方法を考えさせる。
自他共に大切にす	・共に高め合うための自分の（学級の）行動について考えさせる。

第2学年 学級活動 学習指導案

題材名： 体育大会を振り返り、これからの学校生活に生かそう

(1) 本時の目標

体育大会を通して学んだことを生かし、今後の生活における行動目標を決定することができる。

(2) 学習展開 (本時)

学習活動	指導上の留意事項 (◇) 「努力を要する」状況と判断した生徒への 指導の手立て (◆)	評価規準	評価方法
1. 課題意識をもつ。	◇事前に記入した「体育大会振り返りカード」を読み返し、体育大会を振り返らせる。		
2. 本時のめあてを確認する。	◇体育大会の写真を提示する。 ◇「体育大会振り返りカード」で互選されたMVPの生徒や他学年へのメッセージを紹介する。		
<p>【めあて】 「体育大会における自他の頑張りに気づき、今後の生活における行動目標を決定することができる。」</p>			
<p>【自他共に大切にする】 ・自他のよさに目を向け、生かすことを話合いの視点とすることを共有する。</p>			
3. 体育大会で学んだことを班で話し合う。	◇事前の指導 (班長会) において確認した「体育大会振り返りカード」の内容などを踏まえ、体育大会で学んだことについて班内で班長を中心に話し合わせる。 ◇頑張れたことやもっと頑張れたこと等に分類させる。 ◇自分だけでなく、学級の仲間の頑張りの変化にも目を向けさせる。 ◆話合いに参加しにくい生徒には、自分の書いた「体育大会振り返りカード」を班員に提示させる。		
<p>【自己理解・他者理解】 ・他者のよさや支えに気付かせる。 ・自他のよさや課題を見つめ、生かす方法を考えさせる。</p>			
4. 個人の行動目標を決定する。 体育大会で学んだことを生かし、個人の課題を解決するための具体的な行動目標を決定する。	◇班での話合いを踏まえ、個人の行動目標を設定する。	・日常における自己の課題を見いだし、よりよい解決方法について考えている。 [集団や社会の一員としての思考・判断・実践]	行動観察 ワークシート
<p>【生徒の反応例】 「仲間を大切にする」「仲間のいいところに目を向ける」「仲間に迷惑をかけない」「学級での役割をやりきる」「時と場に応じた行動をする」「他の行事でも全力を尽くす」「1年生の見本となる行動をして、頼られる2年生になる」等</p>			
5. 本時のまとめをする。	◇「個人の行動目標を実践していくためには、どのようなことを心がけて生活しなければならないだろうか。」と投げかける。		
<p>【自他共に大切にする】 共に高め合うための自身の行動について考えさせる。</p>			
<p>【生徒のまとめ例】 仲間を大切にするためには、仲間をしっかり見なければいけないと思う。頑張っていることは認めて、できていないところは注意し合える学級にしたい。体育大会では、みんなが役割を果たし、気持ちの切り替えをしながら取り組めたので、日常生活でもできるようにする。</p>			
6. 本時を振り返り、今後の生活につなげる。	◇お互いの行動目標や本時の活動を通して、気付いたこと等を班ごとで交流させる。		

図13 指導の工夫を取り入れた学級活動 (1 単位時間) の授業展開

2 学習プログラムと中学校理科の教科指導の関連

本学習プログラムと教科との関連を意識した授業について、中学校理科の学習を例に、関連付けた指導方法の工夫について提言する。表10で示したように、本プログラムと中学校理科を「学習内容」で関連付けることができる単元は少ない。そのため、中学校理科においては、「指導方法」を工夫することで関連付けていくことの方が適している。中学校理科の授業（1単位時間）においても、本学習プログラムのテーマである「自己理解」「他者理解」「自他共に大切にす」を、教師が意識して指導方法を工夫することで、より指導の効果が高まると考える。

山崎敬人・柴一実ら(2003)は、理科授業における問題解決学習において自己効力感を高めるためには、授業過程に次の五つの視点を取り入れることが必要であると述べている。

- ・直接体験・モデリングの場の設定
- ・自己選択・自己決定の場の設定
- ・役割遂行・自己責任をもたせる
- ・自己評価、相互評価の場の設定
- ・相互評価による働き掛け

自己効力感を高めるために授業過程に取り入れる五つの視点

これらの五つの視点を、90頁表4の本学習プロ

グラムで育成を目指した力を中学校理科の指導方法の工夫として、次の表12のように稿者が整理した。ただし、「直接体験・モデリングの場の設定」の視点は、生徒の学習意欲を喚起するためのものであり、本学習プログラムとの関連は薄いと考えられるため、表12では示していない。

表12 理科における指導方法の工夫

本学習プログラムのテーマ	五つの視点
自己理解	<ul style="list-style-type: none"> ・自己選択・自己決定の場の設定 ・自己評価、相互評価の場の設定
他者理解	<ul style="list-style-type: none"> ・相互評価による働き掛け
自他共に大切にす	<ul style="list-style-type: none"> ・役割遂行・自己責任をもたせる ・自己評価、相互評価の場の設定

これらのことを踏まえた本学習プログラムと、学習内容での関連付けが難しい中学校理科の単元の授業における指導方法の工夫の一例を、平成26年度広島県中学校理科教員授業力アップ研修の学習指導案を基に作成した。図14に示す。

第1学年 理科 学習指導案 単元名：身の回りの現象（光の世界）

(1) 本時の目標

立案した実験を行い、結果の整理・考察を行い、光の反射の法則を説明することができる。

(2) 学習展開（本時）

学習活動	指導上の留意事項（◇） 「努力を要する」状況と判断した生徒への 指導の手立て（◆）	評価規準	評価方法
1. 導入 ・前時に学習した、光の性質を確認する。 2. 自然事象に対する気付き ・12枚の鏡を使って、光を反射させながら、ゴールまで光を届ける方法を考える。 3. 課題の設定 ・光が反射するときの決まりを考える。	◇「光は直進する」「物体に当たると反射する」ことを確実に押さえる。 ◇鏡をどの場所に置くかを考えさせる。 ◇次の2点の視点を与えて考えさせる。 ・的になる鏡に向けて光を反射させるための鏡の向き。 ・光が入射するときと、反射するときの角度。		
【課題】 「光が反射するときの光の進み方にはどのような決まりがあるのだろうか。」			
4. 仮説の設定			

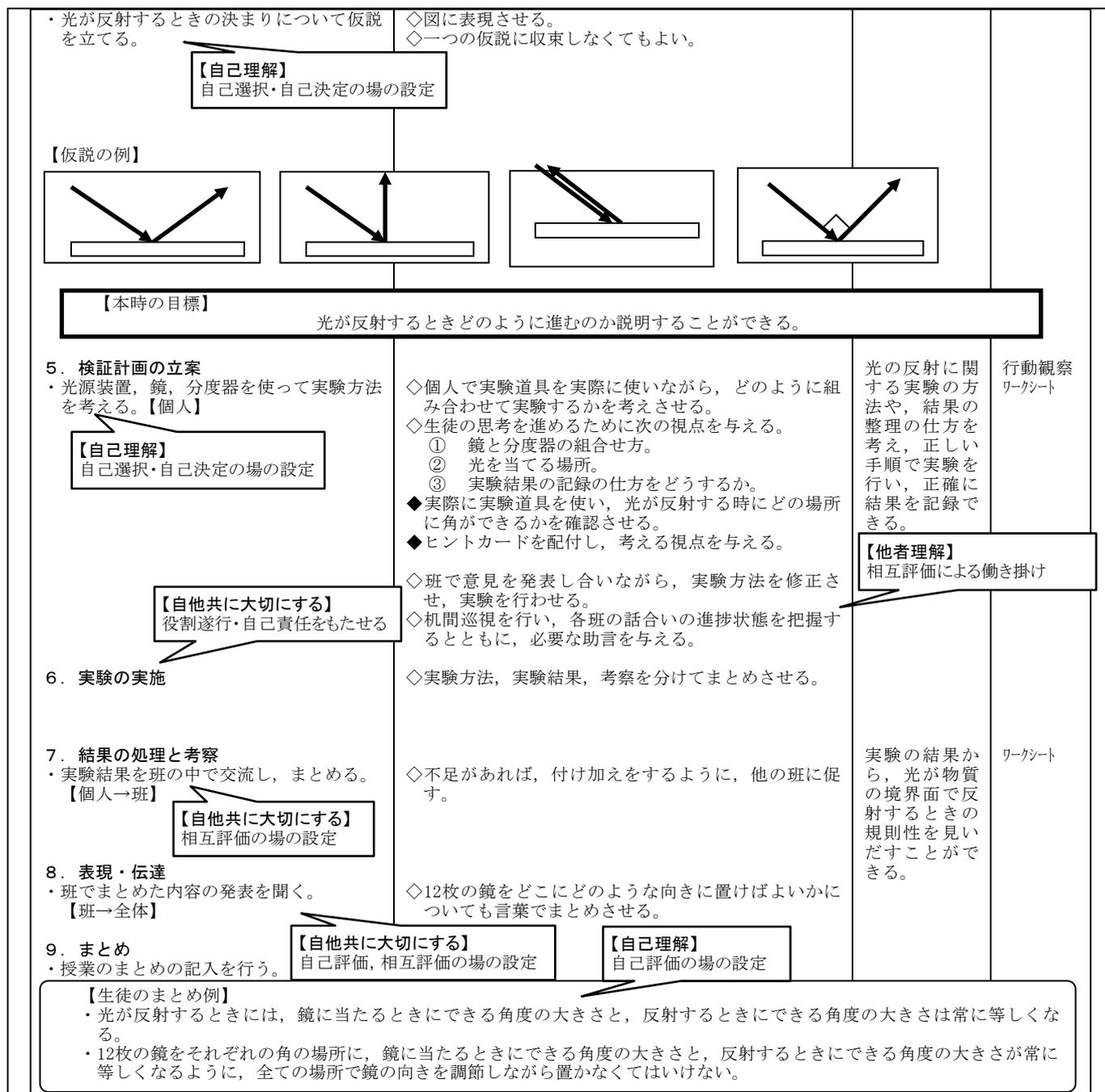


図 14 本学習プログラムと中学校理科の指導方法の工夫の関連の一例

本学習プログラムは、「平成29年度研究」で作成した、小学校におけるレジリエンスに係る学習プログラムをベースに、中学生に適したものに改善し、自他共に大切にすることに係る特別活動4時間の学習プログラムとして構成し、研究協力校において、授業を実践した。しかし、1回目調査と2回目調査の結果が示すように、この特別活動4時間の学習プログラムに取り組んだだけで、自尊感情やレジリエンスが高まり、本学習プログラムがねらう、自他共に大切にす生徒は、育成されるものではないと考える。提言において示したように、この学習プログラ

ムは、単独で完結させるものではなく、教科・領域と相互に関連付けながら指導する必要がある。単元全体を通して考えるだけでなく、1単位時間の中でも、本学習プログラムで育成した資質・能力が、教科・領域の学習において活用され、さらに特別活動の中で活用されることで、より強固なものとして育成されていく。教師は、どのような場面で、どのように力を発揮させるのかといったことを意識しながら授業実践を行っていくことが重要であると考え

XI 成果と課題

1 成果

教科・領域相互と関連させた特別活動の学習プログラムを研究協力校2校で実施した。学習プログラムにおいて、自他共に大切にできる生徒を育成するための、自尊感情及びレジリエンスに係る取組は、一定の成果を示すことができた。また、自尊感情を高めることをねらいとした活動を中心に、教科・領域相互と関連させた本学習プログラムの有効性を示すこと及び自他共に大切にできる生徒を育成する生徒指導の在り方を提言することができた。

2 課題

本研究では、本学習プログラムと教科との関連を示すことができたが、実践するまでには至らなかった。今後、教科においても実践し、その有効性を明らかにする必要があると考える。

また、同じ学習プログラムを実施しても、学校や学年、学級の実態によってその効果の現れ方に違いが見られた。「提要」には、学年が上がるにつれて全体的な自己評価が低下することが明らかになっていると示されている。また、他者からの評価に敏感になり、劣等感をもつようになることも示されている。このことから、中学生の発達段階において、生徒が自分の成長を実感し、自尊感情を高めることが必要であると考えられる。

学級活動における本学習プログラムでは、十分な効果を得ることは難しかった。本学習プログラムの内容を教科・領域等と関連付け、学校の教育活動全体で取り組むことを通して、自他共に大切にできる生徒を育成していく必要があると考える。

最後に、本研究を進めるにあたり、質問紙調査使用及び分析、研究の進め方等、御指導・御助言をいただいた、奈良女子大学生活環境学部心身健康学科伊藤美奈子教授及び研究協力員の皆様に感謝申し上げます。

【引用文献】

- 1) 文部科学省（平成30年）：『中学校学習指導要領（平成29年告示）解説特別活動編』東山書房p. 52
- 2) 文部科学省（平成30年）：前掲書p. 52
- 3) 国立教育政策研究所（平成27年）：「生徒指導リーフ『自尊感情』？それとも、『自己有用感』？」p. 2
- 4) 文部科学省（平成22年）：『生徒指導提要』教育図書 p. 1
- 5) 城戸茂（平成28年）：『中学校教育課程実践講座特別

活動』ぎょうせいp. 37

- 6) 文部科学省（平成30年）：前掲書p. 52
- 7) 文部科学省（平成22年）：前掲書p. 6
- 8) 文部科学省（平成22年）：前掲書p. 6
- 9) 中央教育審議会（平成28年）：『幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について（答申）』p. 55
- 10) 文部科学省（平成30年）：前掲書p. 32
- 11) 日本生徒指導学会（平成30年）：『日本生徒指導学会第19回京都大会配付資料』

【参考文献】

- 有村久春（2003）：『キーワードで学ぶ 特別活動 生徒指導・教育相談』金子書房
- 中間玲子（2016）：『自尊感情の心理学』金子書房
- 福岡市教育センター（平成17年）：『平成17年度研究紀要』
- 伊藤美奈子・森下文・金子恵美子・向出章子・古賀祐美（2017）：「児童生徒理解のための多次元尺度の開発（1）一項目収集と入力システム」『日本教育心理学会第59回総会発表論文集325
- 片山紀子（2014）：『入門 生徒指導』学事出版
- 神谷和宏（2017）：『子どもの自己肯定感UPコーチング』金子書房
- 安藤博（2014）：『子どもの人権を尊重する生徒指導』学事出版
- 小花和Wright尚子（平成26年）：「自己肯定感とレジリエンス」『児童心理6月号第68巻第8号』
- 小塩真司（2017）：「レジリエンス—回復する心」『自尊感情の心理学』金子書房
- 平木典子（2009）：『アサーション・トレーニング—さわやかに自己表現—のために—』金子書房
- 園田雅代（2010）：『子どものためのアサーショングループワーク 自分も相手も大切に作る学級づくり』金子書房
- 国立教育政策研究所（平成24年）：「生徒指導リーフ『特別活動と生徒指導』」
- 文部科学省（平成30年）：「中学校学習指導要領（平成29年告示）解説総則編」
- 池田隆・北野和則（平成24年）：「自ら学ぶ意欲を育む生徒指導の在り方に関する研究—生徒指導の三機能を生かした学習指導法の開発と評価を通して—」『広島県立教育センター研究紀要 第39号』
- 三津村正和・林安希子（2017）：「学習指導と生徒指導の連関に関する理論的考察—アクティブ・ラーニングの視点を踏まえて—」『創価大学教育学論集 第68号』
- 樋口昇（2017）：「小学校理科における問題解決能力と自己肯定感の育成：実態調査の結果を基にした授業の改善」『武蔵野教育学論集 第3号』
- 山崎敬人・柴一実・神山貴弥・濱保和治・吉原健太郎（2003）：「問題解決能力の育成を旨とした学習指導法に関する研究(3)—自己効力感を高める理科授業の方略—」『広島大学 学部・附属学校共同研究紀要 第31号』
- 東京都教職員研修センター（平成23年）：「子供の自尊感情や自己肯定感を高めるためのQ&A」『東京都教職員研修センター紀要 第11号』